

「血液型人間学」

その歴史

最初に血液型の発見ありき

血液型が発見されたのは1900年。オーストリアのランドシュタイナー博士によるものです。その翌年の1901年に3つの分類（O型、AB型、B型）が発表されると、その噂はたちまち世界中に広まりました。

そもそも、この血液型の発見が無ければ、「血液型人間学」という我々の研究も始まらなかつたのですから、歴史を辿ればまさにこの時が第一歩だったと言つことになります。

ところが、この最初の一步で既に間違いは起こり、その後の迷信を引き起こす起因にもなつたのです。

一般的に血液型と言っても、ご存じの通り血液型にもいろいろな種類がありますが、我々の主な研究対象となっているのは、ABO式血液型のことです。正式にはABO式血液型遺伝子と言われます。

さて、このABO式血液型、たまたま血液の中から発見された為に、血液の型だろうと、「血液型」と名付けてしまったのですが、その後すぐに、ランドシュタイナーの研究チームはこの物質の反応が、体液や臓器や、さまざま箇所を認められることに気づき、すぐさま「体質型」や「全身型」などに名称変更をしようとしていました。

ところが、あまりにセンセーショナルな発表だったせいか、時既に遅く、「血液型」という、『血』のイメージを拭うことは難しくなっていました。

発見後、血液型の噂はすぐに広まり、「やはり

血は争えない」などというような迷信的な言い回しと共に、神秘性を帯びた一種の占いのイメージも与えていきます。

それを好材料にした占い師らも表れました。一方、そうした世俗的な風潮が広がる中で、一部の知識人たちは、異なる観点から血液型に対する閉塞的な姿勢を強め始めます。そしてまた、後に記述する古川氏を含め、能見正比古のように真実を突き止めようとする者たちがおります。

血液型人間学の歴史は、これら二者が複雑に絡み合いながら歩み始め、日本社会に根付いていったのです。

いずれにしても、真摯に向き合う研究者には障害の多い道のリとなつたのは事実で、この最初の名称にまつわるつまずきが、少なからず「血液型」に対する研究を鈍らせることになるうとは、誰も気づかなかつたことでしょう。事実つい最近まで、「血液型は血液中に存在する物質ではない」と、生物学博士でさえ思い込んでしまうような、無知が横行する事態に陥っていったのです。

とはいえ、「血液型」の発見は大したもので、輸血ということだけをとっても、この発見でどれだけ多くの人々の命が救われたかと思えば、その重要性は明白でしょう。

そして、発見当初は、気質や性向との相関についても興味を持った学者は世界中に点在していたようで、ところどころにその記録も残っています。

当時の日本においても、後述する古川氏よりも前に、血液型と人間の関係について言及した人は案外いたようです。（記録に残っている名前を以下に記述します。※敬称略／原来復・小林栄の論文／高山正雄体質への論及／平野林、矢島登美太軍医／目黒宏次・目黒澄子）

さて、すると日本での研究はどのように進んだのでしょうか。ここに先の「血液型人間学」への道のりは、その提唱者である能見正比古の著作から引用、抜粋することになります。

「血液型人間学」(サンケイ出版 1973年刊)
あとがきにかけて研究ノートより抜粋――

パイオニア古川竹二教授

血液型と性格の関係が日本で言い出されたのは大正時代である。血液型の発見が明治34年だから、ずいぶん早い気づかれ方である。主唱者は教育心理学者で東京女高師(現、お茶の水女子大)の古川竹二教授である。研究は昭和7年「血液型と気質」(三省堂)にまとめられた。

当時はちよつとした血液型ブームであった。軍隊の一部では兵の適性を見分ける重宝な方法として歓迎された。古川説の信奉者もふえ、憲政の神様、尾崎萼堂も、その一人だったという。『文芸春秋』誌に医学者の浅田一が「煙草の吸い殻からも性格がわかる」と題して古川説を紹介したりした。

勢いを得た古川氏は『血液型研究』なる雑誌を創刊したが、主として医学界に生じた反対派の、大げさにいえば迫害に苦しめられた。古川氏自身も、やや教祖的な相貌を呈してきたのも、悲劇であった。

私は、古川氏の開拓者(パイオニア)的業績は、だれよりも高く買おうが、さて、その内容となると、反対を受けても仕方のない面がある。これは氏の責任ばかりとは言えない。当時は血液型の知識の普及は貧弱なもので、研究の不便には格段の差がある。

古川研究の最大の弱点は、それも氏のせいではなく血液型の罪でもないが、血液型別に人々を分

類し、さてそれを分析しようとしても、そのための心理学やその他の人間科学諸分野が、当時はまるで弱体だったという点である。

古川説への大反撃

果たして古川氏の気質分析に対し、例外が多すぎるという反対論が続発した。しかし、古川研究に不備があったとはいえ、反対説はいっそう始末のいかめ代物だった。古川氏には、まだ資料努力がある。反対派はほとんど資料ゼロの状態で、数人の例外らしきものをあげて、やみくもに騒ぎ立てる。

まず、まったくの感情論。

「血液型なんかで性格がわかるはずがない」

血液型の生理学的意味は、まだほとんどわかっていない。世界のどんな学者も「血液型なんかで」と決めつけられる者はいないのである。

次の反対派は、科学的根拠がないという。科学的根拠を論理的根拠とするなら、私も本書で、それを、いと平易に示した。科学的根拠を、観察事実の客観性と統計的根拠とするなら、本書に一部かかげた事例でも充分以上であろう。古川氏も小限、血液型と気質の相関関係だけは、統計的に示したのである。

生理学的根拠がないと咎める人がある。だが現在、医学を含む人間科学で、それが明らかにされている分野は驚くほど少ない。それをいうなら、現在の心理学や精神医学の大部分は抹殺されなければならぬ。現に使われている医薬品のほとんどは統計的確率を根拠として実用に供され販売されている。百パーセント確実のはずの抗生物質でさえ、新しい耐性菌が現れたと狼狽する。その根拠が統計的なものだからだ。古川氏が「なぜ、私の説だけが百パーセントの完全を要求されねばならぬのか？」と悲鳴をあげた気持ちもよくわかる。

気質や性格の分析こそは、そのパーセントを少しづつ高めながら、じりじりと対象に迫らねばならないものだ。百パーセントでないとなぎ立てれば、人間科学は一步も進めない。

現在も、たまに「血液型と気質の関係は、かつて学界で否定された」と言う人がある。40年前の学界を基準にするのもおかしいが、（現在もそうだから80年前ということになるが・・・）いろいろ調べてみても、そんな事実はない。否定されているのは古川説であり、血液型と気質の関係ではない。

否定するにしても、同様に「科学的根拠」が必要なわけである。当時の学界は、古川氏の性急な気質分析の結論をとらえて、全体を袋たたきにするのではなく、実証された血液型と気質の関係を、これも実証的な方法で見つめる必要があった。第一、医学者が反対するのはおかしい。精神医学関係は別として、人間の心と行動の知識については、医者もまた専門家ではない。ときには文学者より素人である。

古川説攻撃には、研究以前の学界の事情もあったのかもしれないが、このようにして戦前の血液型と気質の研究はうやむやにされ、日本は戦時代にもまきこまれていった。

作家として『人間科学』を考える

私はよく血液型研究者と呼ばれて迷惑している。その都度お断りするのだが、私は作家として、人間の性格や心の動きに関心を払ってきただけである。それを知る物差しとして血液型を使ってきたに過ぎぬ。生理現象としての血液型の知識は受け売り以上のものではなく、事実、血液型そのものを、いくら研究してみても人間のことはわかりっこない。

たとえばバレーボール選手や力士の血液型別リストを、血液型に精通する医者に見せても、ポ

カンと眺めるだけの人が多いであろう。逆に血液型のことを知らないスポーツ評論家たちに見せると、彼らはたちまち興味を示し、たちどころに血液型ごとの共通の特徴を発見し指摘する。理由は、彼らがバレーボールや相撲について、くわしく知っているからである。

もし私が、この分野の研究にいくぶん成功を収めているとすれば、それは私の長年の、多くの分野にわたる無数の人々との接触と作家体験のせいである。私は心理学を含む人間科学は、研究者自身血まみれ泥まみれになり、手と足をフルに使って、人間に関する資料をつかみとって来なければならぬものと考えている。いわば人間科学のフィールドワーキングだ。書斎や研究室が中心の学問ではないのである。

最初の興味は400人の寮生活から

私が一つ年長の亡姉、幽香里から、血液型と気質の関係を聞かされたのは、中学に入って間もなかったが、関心を強く持ち始めたのは大学以後である。私は400人ほどの寮の委員長となり、寮内によろずもめぐりに立ち会って来た。戦時中のことで、寮生名簿には血液型が記入してある。それを見ながら寮生に接しているうちに、気質の違いが、ありありと浮かび上がって来る。これはただごとではないと私は座り直していた。最初にまず具体的な事実に向面したのが幸いしたと思う。

それでも、やはり最初は、一般の性格用語と血液型を対応させようとした。神経質は何型かというたぐいである。何型は外交性かというようなことである。こういうことをしているうちは、さっぱり成果が上がらなかった。当たり前のことである。神経質という単語の中には事実はないのだ。事実は事実の中にある。具体的な現象の中から、たとえ断片でも、それが矛盾に見えても、事実を

事実のままに拾い集めて来るのが大切なのだとわかってきた。こうして集めた事実を集成すると、A型ならA型の気質が浮かび上がる。そのA型の気質は、何タイプなどと名付けようもないし、名付けても全く無意味である。A型はA気質としか言いようがない。そして集めた気質の断片をより基本的なものと、より枝葉的なものに仕分けながら関連づけ整理していく。

そうは言っても、簡単に進化したわけではない。これは重要な気質の問題だと思ったことが、ただの習性にすぎないことがわかって落胆したこともある。矛盾は矛盾のままといったが、あまりにも不合理な人間の行動にぶつかると、迷いもするし、抵抗を感じる。

今になれば笑い話だが、本人の申告に基づいて、A型の妻を長くO型と信じていたのも、私を随分混乱させた。これは戦時中の検査ミスである。戦争中に集団で行われた血液型の検査にはかなりのミスが多い。5、6年前、妻の正確な血液型が判ったから、多くの不明な点がいっぺんに辻つまが合ったのは事実である。

研究分析を世に出す決意

こうして整理して来た結果の一端を、1971年夏『血液型でわかる相性』の著名で出版した。大衆的な体裁をとっているが、新しい分野の研究を世に出す場合、やむを得ない事情がいろいろある。

多くの人々から激励をいただいた。

もっとも、中には、「血液型と性格、あれは迷信だ」と言って歩く人も、ないではない。迷信とは、事実を示す資料も根拠もなく、何かを信ずることをいう。この人はもちろん、血液型と性格の関係を否定するための、これといった調査資料を持っていないわけではない。迷信ということ自身が、迷信なのである。

血液型に関する迷信は、ないことはない。古川説は学界から黙殺されたが、潜在的な興味や関心は、人々の心の中に流れ続けてきた。中には、自分の目で確かめながら、多くの事実をつかんでいる人もすくなくない。しかし一方では、大した根拠も持たず、ごく局限された観察だけに基づいて理論をかけた、説き回る人が、何人かいる。この場合は、迷信と言わざるを得ない。そのような迷信は、少なからず研究の足を引っぱることになる。

私は血液型による人間の分類研究を、独占しようなどという気は、むしろ、毛頭ない。また、できるものではない。この広汎な分野は1人や2人で成し遂げられる仕事ではないからである。同学の士が1人でも多く現れ、相ともに研究に協力し合い調査結果を交換し合っていくことを、むしろ夢見ている。「知識は万人のものでなければならぬ」のだ。私の集めた資料は、そうした同学の人には、ことごとく公開すべきものである。

人間科学は数学や天文学などとは違い、社会と没交渉では一歩も進み得ない。万人の強力による万人のための分野である。私はこの分野に真の意味の大衆科学のあり方を見つめている。

この分野に真摯な関心を持つ方々が、少しでもふえていき、そうした人々にお目にかかる機会を、心から待ち望んでいる。

能見正比古の急死

その後、合わせて十三冊の研究報告としての著作を世に送り出した能見正比古でしたが、1982年10月、講演の壇上で倒れたまま、帰らぬ人となりました。

能見正比古が、この研究発表を行ってからの1

0年あまりの活動においては、息子の俊賢と共にA B Oの会を発足し、延べ3000人あまりの会員を集め、全国に支部も出来ました。有名大学の多くで、血液型サークルが結成され、このユニークな研究に人々の注目が集まりました。

能見正比古の研究熱心さと、そしてずば抜けて気さくな人柄、その豪傑肌の風貌は、愛弟子として可愛がられたマスコミ界の大御所であった大宅壮一にも似ていて、会う人々に強い印象を与えていたようです。

能見は東大工学部を卒業しましたが、ここでは満足できなかった知識を得るために新たに法学部に入学します。ところが学費稼ぎに三木鶏郎グループに加わると、放送作家の仕事が俄然忙しくなってしまう。

能見の若い頃からの秀才奇才ぶりは、東大時代の学友たちだけでなく、マスコミ各界にも知れ渡るようになり、「あの能見くんが何やら面白いことを始めたらしい」ということになり、研究発表当初は学者や文豪や、多くの知識人たちも支持する声をあげていました。

しかしそうした、世の中を騒がす勢いの血液型旋風に比べて、血液型に関する生化学的研究はそう進んでおらず、一部の学者らの批判的な不満は沸々とわだかまり始めていたのです。

能見が56歳という若年でこの世を去った後には、それまでの支持者らも徐々に口をつぐみ始めるようになります。

科学界ではようやく、米国を中心にヒトゲノム計画(D N A 解析国際チームの結成)が始まるうとしている最中でした。

能見俊賢の広報活動

能見正比古自身は、既に大学時代から研究データを積み上げていたとはいえ、世間に公表してからはまだ10年足らずです。やっとその足掛かり

を作ろうとする時に、提唱者の突然の死去はあまりに痛手が大きく、研究の継続自体が危ういものでした。

そして実際、この分野が社会の正当な評価を得るには、血液型の生化学的な解明を待たねばなるまい。それは遠い道のりかもしれない。能見正比古の意志を継いだ息子の俊賢は、そう実感すると、「親父が苦勞して積み上げた研究成果をいかにして生かし続けるか」という、それはある意味、苦肉の策ともいえるのですが、その攻防に惜しみなく力を注ぐことになりました。

幸い、人々の関心はしばらく薄れることはなく、テレビや雑誌のマスコミでは相変わらず引っ張りだこで、特集番組や連載、著作、各地の講演活動など、啓蒙活動に励みました。

そうした能見俊賢の苦勞が功を奏して、能見正比古の著作は各出版社で幾度となく改訂され、亡くなって20年経った後まで生かされることになりました。

しかし、マスメディアという媒体に情報発信を委ねる中、多くの人々に浸透する反面、主観や決めつけ的な噂が独り歩きするのを防ぐことは、その広がりと共に、益々困難になっていきます。

それでも能見俊賢の普及活動は、海外にまで及びます。中でも韓国への普及は、既に日本の噂が届いていたせいもあり、わずか数年足らずのスピードで一気に韓国中に広がっていきました。

それにしても、「血液型人間学」に対する一部知識人たちの批判は、相変わらず感情論に終始し、似非科学、非科学的と決めてかかるだけでなく、それを信じる大衆を愚弄するような発言さえ随所で見られました。ただ、そこで注目に値するのは、そうした圧力がありながら尚、信じる者が一向に減らないという実態なのです。

それはつまり、多くの人々が、血液型と人間性

に何らかの関係性を、理論や理屈ではなく、実体験で、あるいは直感的に、感じ取っているからに他ならないのです。これはまさに、大衆の知性に訴えかけ続けた、能見正比古・俊賢親子の勝利とも言えましよう。

能見正比古が10年という短期間で、密度の高い仕事を成し遂げたのは、B型ならではの凝り性ぶりや周囲を意に介さない行動力を発揮したからであり、その偉業を守るために、辛抱強く啓蒙活動に勤しんだのは、能見俊賢のこれもまた、A型的な忍耐強さであったのではないのでしょうか。

2003年、ヒトゲノム解析が完了したことが、全世界のニュースで流れました。それは新しい時代の到来を告げるものでもあり、「血液型人間学」にとっても何らかの進化を予期させるものとなりました。

「これから科学の世界も新しいフィールドへ向かうだろう。そしてそう遠くない将来、血液型遺伝子の本来の意味が理解されるようになるー」

長い年月、さまざまに批判にさらされながらも、第一人者の責務を負ってきた者にとって、それは喜びというより、安堵に近いものだったのかもしれない。

能見俊賢は翌年、NPO法人血液型人間科学研究センターを立ち上げると、次の時代に研究の発展を託すかのように、2006年の秋、他界しました。能見正比古より2年長いだけの、58歳になろうとするときでした。

2012年 冬

(文/A B Oセンター代表・市川)

